（2016 年 9 月 26 日受稿　2017 年 1 月 7 日受理）

【資　料】

鳥取大学附属特別支援学校専攻科 10 年の成果と課題
――修了生の悉皆調査から――

澤田淳太郎（鳥取大学附属特別支援学校）
野波　雄一（鳥取大学附属特別支援学校）
三木　裕和（鳥取大学地域学部地域教育学科）
連絡先　E-mail : j-sawada@fuzoku.tottori-u.ne.jp

1　はじめに

（1）高等部卒業生の状況と専攻科の意義

日本における障害のある子たちへの教育は，1947（昭和 22）年の学校教育法で制度上はその学びの場を規定した．しかし，実態としては，養護学校の設置義務制の完全実施は 1979（昭和 54）年を待つことになった．

國本（2012）は，障害児の教育権保障をもとめた三つのうねりを示している．その第一のうねりが，養護学校義務制の実施を求めた運動の展開である．この結果，1979（昭和 54）年度からの養護学校義務制が実施されるに至った．第二のうねりは，義務教育段階に続く，後期中等教育段階への希望者全員進学を求めた運動である．2000（平成 12）年度からの高等部訪問教育の完全実施により，高等部希望者全員進学の要求が実現した．そして，第三のうねりは後期中等教育後の教育の機会を求める取り組みである．具体的には特別支援学校高等部専攻科，高等教育機関への教育の機会保障，社会教育分野の青年学級等である．この第三のうねりの背景にあるのが，後期中等教育段階である特別支援学校高等部の在学者数増加である．特別支援教育の対象となった中学校の通常学級や特別支援学級からの進学者が増え，高等部単置型知的障害特別支援学校の設置が増加傾向にあった．伊藤・越野は，その現状や課題を調査する中で，「特に高度に複雑化した現代社会においては，義務教育終了後から，「社会的自立」をするまでの猶予期間は十分に保障されるべきである」としている．そして，「この時期を経験し，より人生を豊かなものにしていくことは，「青年期」の発達課題であり，この権利を「モラトリアム権」と呼び」，「発達に何らかの障害や困難をかかえる青年たちにも保障されるべきと考える」と述べている（2009）.[1)]

障害のある青年たちが，機械的に 18 歳での就労を強いられ，さらに就労後離職することを問題とされたり，精神医学的な困難に直面することが少なからずある．そうした状況であるので，高等部卒業段階の青年たちが社会参加への期待を受け，それが圧力となっていることは想像に難くない．小畑（2006）は，「青年期のなかで主体性を発揮できる人間として成長をとげ

るには，（高等部での：引用者）3年間では短すぎると言わざるをえない」とした上で，「現実の高等部教育の多くは卒業後の就労をめざして働く力の育成が中心となり」，「ともすると，青年期の生徒に受身的な態度を形成してしまっている」と述べている.[2] このような状況の中で，青年たちの「教育を受ける権利」が充分に確保されているといえるのであろうか．このような中で「学びたい」と思う青年期の教育の場である専攻科の意義は大変大きい.

（2）問題の所在

昨今は福祉事業型専攻科も増えてきている．船橋（2014）は「「学びの作業所」づくりは，日本の特殊な2つの教育事情，一つは，知的障がい者は18歳で社会に出るしか道がない（進学の格差）こと，二つは特別支援学校が職業教育へ偏重していること，この2つの中から生まれた運動です」とした上で，小畑（2013）や國本（2012）の論述を基に，学校教育との関連での「学びの作業所」の意義を「専攻科の代替（代位）としての「学びの作業所」は，教育年限延長の意義の理解を広げ，教育制度としての専攻科の設置を早める意義をもっています」としている.[3]

このような動向の中，国公立学校唯一の鳥取大学附属特別支援学校専攻科は，2017（平成27）年度で設立10周年を迎えた．過去10年間に修了した生徒は32人であり，それぞれの道を歩んでいる．今回は，10周年を機に，過去の修了生への悉皆調査を通し，修了生の現在の生活の様子を把握し，専攻科での学びがどのような意味があったのかを検討し，知的障害のある人の青年期教育のあり方について考えるとともに，今後の本校専攻科のあり方を考える機会としたい.

2　本校専攻科の概要

調査結果を示す前に，本校の概要と，本校専攻科の理念を説明する．本校専攻科修了生がどのような教育課程で学んだのかということが，調査結果に関わってくるからである.

（1）鳥取大学附属特別支援学校

本校は1978（昭和53）年に開校した．本校研究紀要第1集によると，当初は，「障害があっても障害の程度に応じて，社会人なり職業人なり，または家庭人として自立する」ことを目指し，教育目標を「積極的に参加しうる人間の育成」と定めていた.[4]

障害者の生活をとらえる視点が「ADL（日常生活動作）」から「QOL（生活の質）」へ変化する中で，1995（平成7）年度から「生活を楽しむ子の育成」をめざしている．つまり，本校なりに「人格の完成」（教育基本法第1条）の道筋を示そうとしたのである.

また本校が掲げている「生活を楽しむ」とはその場かぎりの「享楽的」なものではない．児

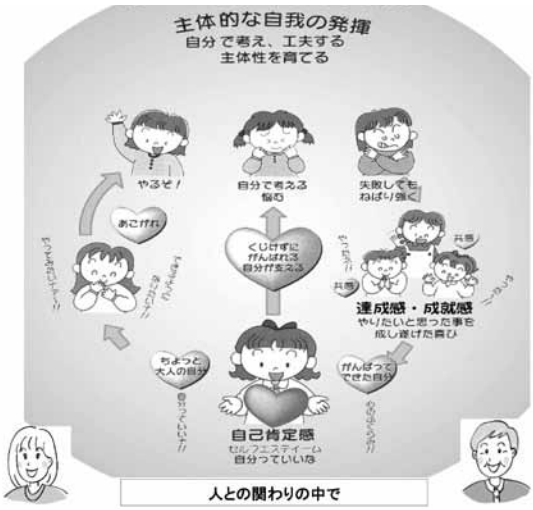

図1：自己運動サイクル
（鳥取大学附属特別支援学校　研究紀要第32集2016年より引用）

童生徒が気持ちを循環させながら自己肯定感を膨らませていく内発的で主体的な過程を「自己運動」（図１）ととらえ，児童生徒の内面を大切にした実践を進めようと考えた．

その内面をとらえ，児童生徒の理解や支援を考えるよりどころにしているのが「自分づくり」という考え方である．この考え方は，田中昌人や白石正久らの理論を参考にしている．本校では，児童生徒を発達の主体ととらえ，児童生徒自身が，人との関わりの中で，自己運動によって自分を形成していくことを「自分づくり」と呼んでいる．このように，「自分づくり」を基盤とした実践を進めていることが本校の特徴である．

（２）専攻科の設置

本校専攻科は2006（平成18）年に開設した．それ以前に専攻科を設けていたのは，私立の知的障害養護学校（現在は特別支援学校）の8校と，発達障害や軽度の知的障害の青年を対象にした3校のみである.[5] 国公立の専攻科はながらくなかったが，2004（平成16）年度からの国公立大学の独立行政法人化に伴い，各大学の自主的判断が尊重されるようになったことを受け，定員割れをしていた小学部から6人分の定員を振り替えて専攻科を設けることになった．

設置に向けて，山本ら（2008）は以下のように述べている．

「企業就労しても，人間関係づくり等の難しさから離職する人もいる．そして，①障害があるからこそ，もう少しゆっくり学びを保障する場が必要なのではないか．②青年期・成人期の「自分づくり」や自立支援・地域社会生活への移行支援がニーズになっているのではないか．（中略）本校でも18歳時点での就労，職業訓練，福祉サービス利用（福祉就労）以外の進路の選択肢が広がればという思いであった」.[6]

まさに，障害のある子どもたちへの教育権保障の「第三のうねり」の中での設置であったといえる．

本校専攻科の理念は，「子どもから大人へ」「学校から社会へ」という二重の移行支援を重視している．発達に遅れがある場合，教育現場においても「子ども」扱いすることが少なくない．しかし，身体が成長すれば，大人としての役割，モラルやエチケットが求められる．そのため，意図して暦年齢にふさわしい「大人扱い」をする教育的な人間関係を築くことで「子どもから大人へ」の自分づくりの移行支援をねらっている．また，「学校から社会」への移行では，社会に合わせようとして「学校から仕事へ」と移行支援が矮小化したり，「職業自立」をせかすことが多くなったりする危険性を避け，本人の苦悩や葛藤に寄り添う必要がある．そのため，「子どもから大人へ」「学校から社会へ」の移行支援を不離一体の「二重の移行支援」と位置づけている.[7]

先述した本校の理念を基盤としながら，専攻

表１：求める人物像

○“自分らしさ”をみつけ，もっと自分に自信をつけてから，社会に出る．
○コミュニケーションの力を高め，人との関わりを広げる．
○自分たちで計画を立てて，校外学習や研修旅行等を実施する．
○いろいろな職場体験をして自分の適性を知り，自分で進路を決める．
○自分の楽しみを広げ，余暇の時間が上手に使えるようになる．
○調べたいことを研究して，それをまとめ，パソコンで発表する．
○新聞を読んだり，話し合いをしたり，大人としてのたしなみやマナーを身につける．
○グループホーム体験で，家族と離れ，地域の仲間と暮らす学習をする．

（上記の内容は設立当初の願いを大切にしながら，少しずつ変更してきた現在の内容である）

科も青年期の「自分づくり」を目指した．青年期がアイデンティティの形成期・社会自立への準備活動期であるとすれば，それは高等部本科以上に求められる．青年期の移行支援教育として，①普通科の専攻科，②２年制（１学年定員３人，計６人の複式編成），③社会参加・地域生活を促す「青年期の自分づくり」を基盤とした教育課程を目指した．そして，学校側が求める具体的な姿として，表１のような生徒像を挙げた．

教育課程は，これまで積み上げてきた学習を統合し，継続しながら力をつけていくものと新しく取り入れていくものを整理して「くらし」「労働」「余暇」「教養」「研究ゼミ」の５領域で編成している（図２）．この中で，仲間や社会資源との関わりを通して“青年期の自分づくり”が進み，社会に出て自分を見つめ，自己をコントロールして積極的に“自立生活・社会生活参加”する青年に育つことをめざしている．

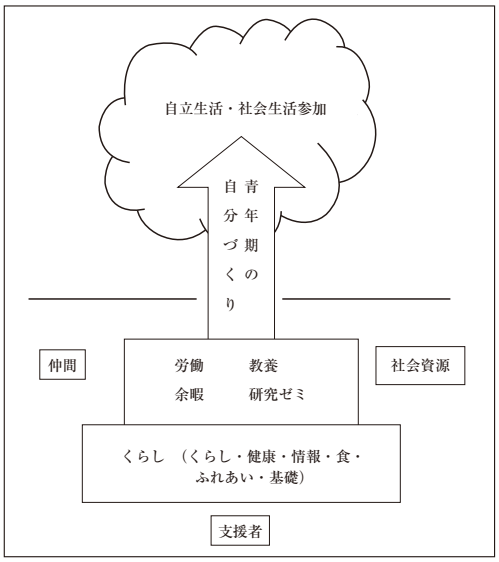

図２：教育課程

３　調査の方法

調査方法は，アンケート調査とインタビューを用いた．調査は，本校専攻科修了生とその保護者を対象とした．回収した中から，特徴的な修了生を抽出し，インタビューを行った．

（１）アンケート調査（悉皆調査）

以下にアンケート調査の概要を上げる．

表２：アンケート調査の概要

発送時期：	2016（平成 28）年６月 11 日
回収時期：	2016（平成 28）年６月 24 日
対象人数：	修了生 32 名（2007（平成 19）年度～ 2015（平成 27）年度までの専攻科修了生） 修了生保護者のべ 32 名（１組兄弟があるので，実際の人数は 31 名である．アンケートは２名分回答いただいた．）
回 収 率：	100 %（この数字は締め切り後に回収したものも含んでいる．）

アンケート項目については，知的障害児施設退所者への調査を行っている平井（2015）や見晴台学園の卒業生追跡調査を行っている大竹・永吉（2009），本校専攻科設立５周年の時に行った保護者へのアンケートを参考にした．また，本校の特色である「自分づくり」の様子についても考慮に入れ，表３のとおり，４項目とした．回答者の実態を考慮して，設問では，４～５段階の多項選択式を中心に用いているが，質問内容によって重複回答の選択式，自由

表３：修了生本人へのアンケート項目

【現在の様子】
・現在の住まいや暮らし方
・体調について　等
【進学先・就職先について】
・仕事や生活が楽しいか
・困ったときにどうしているか　等
【生活に関すること】
・余暇の過ごし方
・公共施設の使用状況
・将来への希望　等
【学生だった時について】
・学生時代を振り返ってどう思うか　等

記述も取り入れている．また，一人での回答も予想されたのでルビを振った形で10ページの分量となった．

表4：修了生保護者へのアンケート項目

- お子さんの現在の様子
- 体調不良の有無
- 友だちとの関わり
- 余暇の過ごし方
- 障害者年金の有無
- 生活費の管理方法
- 現在の生活をどう思うか
- 将来への願い

保護者への質問は，表4のとおりである．あえて本人への調査項目と重なる内容と保護者の気持ちを尋ねる内容を設けた．

（2）インタビュー調査

アンケート集計の分析から得られた結果をさらに検討するために，3人にインタビューを行った．この3人は職場でのトラブルを乗り越えた人，地元を離れて暮らす人，次の職を探す転機に差し掛かっている人と，何かしら乗り越えないといけない状況にある（または状況にあった）青年である．トラブルや転機に差し掛かっている青年たちが，どのように乗り越えたり乗り越えようとしたりしているのかをインタビューで聞き出し，アンケートの結果の検証を行おうと考えた．インタビュー項目は表5のとおりである．

表5：修了生本人へのインタビュー項目

- 今の生活で一番大切にしていることは何か．
- 今たくさんのお金が手に入ったら，仕事を辞めるか．
- 専攻科で楽しかったと言っている領域は，どんなところが楽しかったか．
- くじけそうになった時はどうしたか．
- 専攻科のころを思い出して．
- 10年後はどうなっていたいか．

4　アンケート調査の結果

アンケート集計から示唆される結果は以下の通りである．

（1）修了生32人の現状

アンケートの対象者は，専攻科修了後3か月～9年を経過しており，年齢は20歳～29歳である．男性が17人，女性が15人となっている．

①日中通っている場所

日中通っている場所については，福祉作業所と一般就労に二分される．日中通っているところを問う設問（表6）では，「何もしていない」の項目を選ぶものはなかった．

表6：日中通っている場所　（人）

一般企業	3
県庁等のワークセンター	2
福祉作業所	22
学校	1
家や親戚の手伝い	2
その他	2
何もしていない	0

N＝32

②現在の住まい

次に，住まいについてみると（表7），「自宅」で暮らす人は23人である．グループホームで暮らす人が8人，一人暮らしが1人だった．

表7：現在の住まい　（人）

実家	23
グループホーム	8
一人暮らし	1

N＝32

（2）基本的に健康で社会参加する姿

①健康状態（表８）

修了生の健康状態を尋ねた設問では，「健康」「だいたい健康」が合わせて 29 人であった．保護者への修了後本人が大きく体調を崩すことがあったかどうかという設問に関しても，「あまりなかった」「まったくなかった」を合わせて 27 人であった．

表８：健康状態（修了生・保護者）　（人）

修了生（健康状態）		保護者（体調の崩れ）	
健康	18	まったくなかった	25
だいたい健康	11	あまりなかった	2
あまり健康ではない	3	ときどきあった	3
健康ではない	0	よくあった	1
回答なし	0	回答なし	1

修了生，保護者とともに　N＝32

②仕事や生活の楽しさ

現在の仕事（学校）や生活が楽しいか聞いた設問（図 3，図 4）では，仕事（学校）について「とても楽しい」「まあまあ楽しい」が合わせて 29 人，生活については「とても楽しい」「まあまあ楽しい」を合わせて 31 人と楽しいと感じている人が多かった．

仕事が楽しい理由の具体的記述には，「いろいろな仲間たちと仕事ができてとても楽しいです」「前よりも仕事の内容が分かってきて仕事の仲間と協力して仕事をしたり話したりしています」「人に感謝されるから」「老人ホームの人（職員やお年寄りの人）が助かる」「いろいろな人に会えるから」といった仲間や仕事先の相手を意識した記述が多く見られた．その次に多かった回答は，仕事へのやりがいや役立ち感だった．

保護者にも同様に，本人が楽しそうかどうか尋ねる設問（図 5）で「楽しそう」「だいたい楽しそう」が合計で 29 人と，本人と同じような傾向であった．

こうしてみると，仕事面や生活面の感じ方は大きく変わらず，多くが今の生活を楽しんでいることが分かった．

転職経験者は 6 人で，理由は体調不良や，職場での人間関係トラブルであった．ただ，内 4 人からは「いろいろな仲間たちと仕事ができてとても楽しいです」「母や指導員に会えてほっとする」「好きな事だから」「人にかんしゃされているから（まかせられているから）」といった記述に見られるように，仕事に対するやりがいを感じていることが推測された．

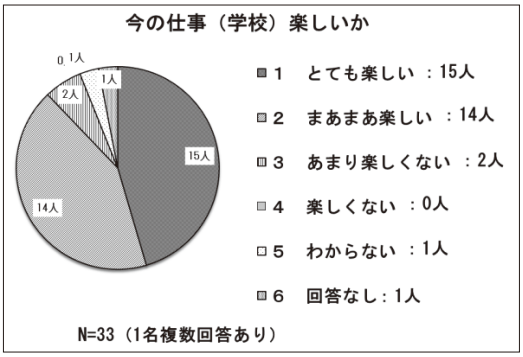

図３：仕事（学校）・本人の感じ方

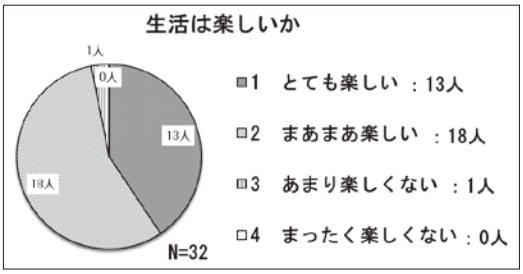

図４：生活・本人の感じ方

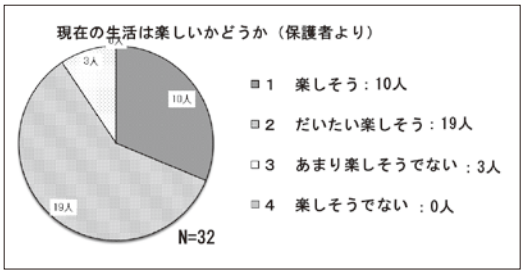

図５：現在の生活が楽しそうか（保護者）

③生活の中で楽しみにしていること

次に，余暇の過ごし方について見てみる．帰宅後や休日の過ごし方は，家でテレビを見たり，趣味の時間にしたりする人が多かった．

余暇の広がりが見られないようにも感じるが，同じ世代の大学生からは，「自分たちもこんな感じ」「せっかくの休日くらい家でゆっくり過ごしたい」といった意見があがった．また，一緒にデータを検討した専攻科生と同世代の子どもを有する職員からも同様の意見があがった．この意見を考えると，一概に余暇の広がりがなく困っていると考えることはできない．

生活の中で楽しみにしていることを聞くと，26人が何らかの楽しみがあると回答している．

中には，「父母がいなくなったらどうやって暮らしていけばいいのか分からないです」「光熱費が難しい」といった現実と向き合う回答も見られた．ただ，将来について尋ねる設問では，「今のまま」暮らしたいという人が多数を占めた．

以上のような内容から考えると，基本的には健康で社会参加していると考えられた．

（3）悩み・困り感を持ちながら，信頼する人に相談する姿

①困り事と解決方法

アンケートでは，約4割～半数の人が，仕事面または生活面において，困ったことや嫌なことがある経験をしているという回答がある（表9）．しかし，その解決方法を探ってみると，個々に悩みを持ちながらも相談して解決に向かったり，割り切ったりしてがんばっている様子もうかがえた．

表9：困り事の有無（修了生）　（人）

仕事での嫌な思い		生活で困ること	
ある	4	よくある	2
すこしある	9	ときどきある	13
ほとんどない	9	ほとんどない	10
ない	7	ない	6
わからない	2	わからない	0
回答なし	1	回答なし	1

N＝32

修了生本人が困ることの中心は「仕ごとでしっぱいしてちゅういされたから」「意見の食い違い．度を超えてキツイ冗談を言われた時．人まかせにされた事も」「他の利用者がうるさい」「陰でこそこそ悪口を言われたりされたからです」「作業担当者の方と何となく気持ちが合わない事があってしんどかったです」等といった対人関係に関する記述が多かった．

表10：困り事の解決方法（修了生）　（人）

解決方法（相談相手）	職場（学校）	生活
家の人	9	12
職場の上司	10	4
友だち	4	2
相談機関の人	1	2
インターネット（SNS）	1	0
未解決	3	3

表9の設問で，「ある」「すこしある」又は，「よくある」「ときどきある」と回答した人が重複回答した結果．「職場（学校）」についてはN＝13．「生活」については，N＝15である．

ただ，表10に見るように，困ったことを，ほぼ自分から誰か（家の人，職場の上司，友だち，相談機関の人など）に相談して解決している姿がある．これは，自分から相談できる力もさることながら，相談をかけようと思う仲のいい人や信頼している人がいるということだろう．

②困り事を解決していない人たち

ここで気になるのが，「解決していない」と答えている3人である．この3人について詳しく内容を検討した．内訳は平成19年度修了の男性（29歳），20年度修了の男性（28歳），

21 年度修了の男性（27 歳）であった．この内，20 年度修了と 21 年度修了の人は，「解決していない」以外に友だちや家の人に相談しているとも答えている．また，19 年度修了の人は嫌なことの内容としては，「そこまで困ってない．慣れた．相談するほうがめんどくさい．人と会話しにくい」とあげている．他の設問の記述に「変化にそんなに強くない（人見知り）」，「朝が少し弱い」，自分が「ゆうずうがきかない時」に困るといった記述もあった．このような記述の様子を見ると，解決していないものは，何となく自分の課題を見出し始めている，もしくは見つめているような印象を受ける．それが「解決していない」と答えた要因でもあるだろう．ただ，この状況は周囲の理解が低い場合も考えられる．しかし，3 人とも生活に楽しみを持っているという回答はあった．

③仲間関係

表 11 のような仲間関係であった．専攻科で仲間を増やし，交流が続いている学年もある．この仲間関係も，社会に出てからの大きな支えになっているのであろう．

表 11：関わる友達　（人）

関係	修了生	保護者
職場	5	0
高校時代	3	11
専攻科時代	6	15
居住地（小･中学校）	1	4
サークル等	3	0
その他	4	1

余暇の過ごし方について，「友人と遊ぶ」と回答した人が重複回答した結果．「修了生」「保護者」ともに N＝19.

このように家族，職場の人，専攻科での仲間，サークル等といった，信頼できる人や自分の居場所があるようだ．

今後もこれまでのように周りの助けを借りながら，乗り越えさらに力を伸ばしていくのではないかと考えられる．

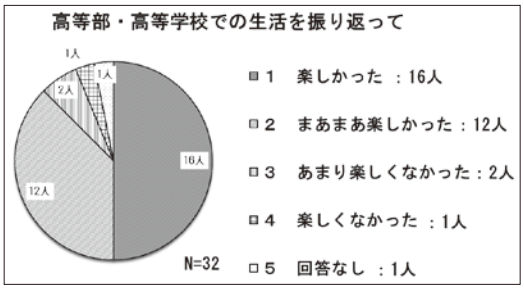

図 6：高等部・高等学校を振り返って（修了生）

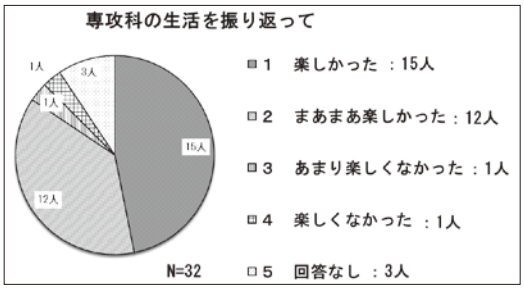

図 7：専攻科の生活を振り返って（修了生）

（4）高等部（高等学校）・専攻科時代を詳しく覚えている姿

①楽しかった高校・専攻科時代

図 6，図 7 にあるように高等部・高等学校・専攻科時代に，比較的いい印象をもっていることが示されている．

高等部・高等学校時代については，「楽しかった」「まあまあ楽しかった」を合わせて 28 人であり，専攻科時代は 27 人である．なお，高等部・高等学校時代について「楽しかった」と回答している 15 人中 2 人は，「楽しかった」ことの具体的記述で専攻科時代の内容を回答しており，高等部時代，専攻科時代ともに，回答は専攻科時代を振り返ったもののようだった．

具体的な記述内容を見てみると，高等部時代の思い出の記述には，「いろんな勉強ができた」「色んな人と話したり，人間関係も学んだ事」「修学旅行と学校祭が心にのこりました」「友だちと一緒にいろんな事ができたから」と

いった友人や教師との関わり，勉強や作業学習が楽しかったこと，修学旅行や学校祭といった行事の記述が目立った．中には，「世の中何をするのか分からなかった．→今になって分かりはじめた．点と点がつながった」という自分を振り返るような記述もあった．

専攻科時代の記述には，1期生の「1年目は苦難－何もないところからはじめた．そろえるところから（日用品など）2年目はにぎやかくなってとまどった」と振り返る記述があった．また，「自分たちで考えて話し合っていろんなことを決めた」「和気あいあい」「仲間や先生たちと一緒にあるいてキズナができたことが楽しかった」「友だちと話しあいながらいろんなけいかくをしてでかけるのが楽しかった」「カリキュラムによる束縛が少なく，自主性に任せてもらえる初めての学校だった．仲間たちと苦手を補い合いながら学べる時間だった」「1年の時は，みんなに合わせる感じが多かったけど，2年になってクラスリーダーになって，一年前のリーダーさんの大変さがわかるなあと思いながらでした．けんかもあったし本当につらいことはあったけど，みんなやさしくて嬉しかったです」といった記述が多く，自分たちで計画，準備など苦労しながら取り組んでいることで印象が強く残っているようである．また，リーダーについての記述もあり，クラスリーダーの存在の大きさもうかがえる．学習内容についても仲間と話し合って計画，実施する「専攻科合宿」や「研修旅行」の記述があった．表12からもその様子はうかがえる．また，知りたいことを深く探求していく「研究ゼミ」も印象に残っているようだ．

表12：専攻科で学んで良かったこと

修了生（人：重複回答）

研修旅行	24
専攻科合宿	18
研究ゼミ	15
研究ゼミ発表会	9
ウォーキング	14
余暇の経験	12
ラッキョウマラソンへの参加	7
話し合って決める活動	10
仲間と雑談	10
公共施設の使い方	8
ボランティア活動	7
労働	5
その他	5
回答なし	4

N＝32

②保護者の評価

保護者の印象としても，図8にあるように専攻科の意義を感じている人が30人である．あまり意味がなかったとしている2人は，修了生本人が専攻科時代に精神的に落ち込んでいたためである（但し，付記があった．1人は「思春期だった」ということと，その要因として住まいが変わったことを理由としてあげられた．もう1人は「ほとんど通学できなかったので」としながらも，「ただし，先生方とは逢いたいようです」と書かれていた）．

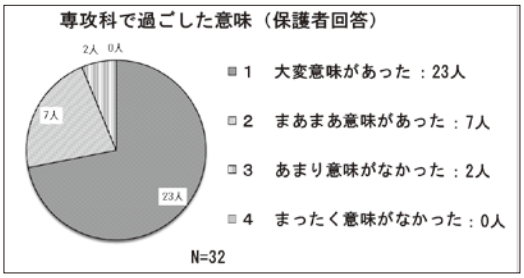

図8：専攻科で過ごした意味（保護者）

また，「保護者が専攻科に望むこと」という設問には，「我が子に対しては，社会に出る前に，少しいろいろと，出来る様になった時期に，ゆとりをもって過ごさせていただいたことは，本人の大きな財産になっていることでしょう．社会へ少しでも自信をもってむかえることがとても大事だと思いました」「自分に自信を

持って，沢山学べたおかげで，今があると思っています」「専攻科があったおかげで，高校卒業と社会生活にワンクッションあり，いろいろ心も経験も準備できたと思っています」等といった肯定的な記述があった．総じて，本人も保護者も，専攻科で学べたことに意味があると感じていた．

③修了生から先生への一言

修了生本人から「学校の先生への一言」の具体的内容に，「専攻科10周年おめでとうございます．今後もこの鳥大の専攻科が発展することを願います」「専攻科に生徒がたくさん来るといいですね」「専攻科わとっても楽しかったです」「いっぱい心配かけました．大学生みたいな生活は楽しかったです．ありがとうございました」とあった．学校や，先生への思いやりがあるメッセージで，かつ，自分のことを振り返りながら書いている内容のものもある．気遣いがうかがわれる点が，「大人の対応」を感じさせる．

（5）調査から気になった点

①休職経験者の事例

修了後，仕事等につく中で長期に休んだことがあるかどうかについては，「ある」が6人いた．長期に休んだ人の理由は精神的な理由で入院が1人，精神的に不安定になったり気持ちが落ち込んだりしたという人が2人，体調不良によるものが1人，薬による副作用が1人，無回答が1人であった．進路担当の教員と連絡をとり現状を把握した．精神科入院を記述した1人は，現在住まいとなっている福祉施設の職員とうまく折り合いをつけられず，不安定になった時の入院ということであった．ただ，年々安定してきており，今年度は入院が1度しかなく現在は健康であるということであった．精神的に不安定になったことがあると答えた人に関しても，保護者や周りの人に相談し，現在は「一人暮らしを目指す」という希望を持ちながら生活しているとのことであった．無回答の人に関しては，以前の職場で上手くいかず，落ち込んでいたが，今年度に入り，進路担当が連絡をとりフォローアップをしているところである．体調不良の人に関しても，現在の状況は改善していることが確認できた．また，全員が生活に関して楽しみを持っていることや，将来の計画に「一人暮らし」「余暇時間を増やしたい」「シェアハウスで仲間と暮らしたい」といった回答があり，将来への希望を持ちながら暮らしていることが分かった．

②精神的な症状が出た人

調査を進め，本校で把握している障害名とアンケートの結果とを照らし合わせると，精神的に悩んだ人は，発達障害の傾向のある人が多いことがわかった．

相手の気持ちを推し量ったり，系列的に物事をとらえたりすることに苦手な部分がある状況で，なかなかその状況が理解してもらえずに，精神的に追い込まれてしまうことが想像される．この状況は，アンケートで見えてきた困り感に「人間関係」の項目が多いことからもうかがえた．また，精神的にダメージを受けた人は，専攻科在学中からその傾向があったことも事実である．アンケートの中でも，専攻科時代に精神的に辛い時期を迎え，あまり学習に向かえていなかったと書いた人がいた．

③調査への返信

次に考えたいのが調査への返信のことである．先に述べたとおり，7月末時点（締め切りは6月24日）での回収率は6割ほどだった．調査依頼に対するレスポンスが低いということは，公的機関からの他の調査等への返信にも関わってくるのではないかということも考えられる．

1回目に回収できなかった人のほとんどが，「締め切り日を過ぎたので，もう出さなかった」ということだった．期限に間に合わない理由として，本人が何を書けばよいのか，どう答えたらよいのかがわかりにくかったという声もあった．あわせて，本人，保護者とも忙しかったということも要因であった．

④金銭管理

金銭の管理については，回答を見ていると，本人が全ての管理を行っているのは1人のみで，通帳管理等の支援を受けながら生活をしている人がほとんどである．

金銭管理については，予定して使う分，不時の出費に必要な分，余暇等に使いたい分等々，使い道について計画性が必要である．さらには，季節によって光熱費が変動したり，天候の影響などで食費が左右されたり等，使用分と貯蓄分，社会状況の見極め等，様々なパターンを考えなければならない．少なからず保護者や支援員といった人からの支援が必要であろう．

もちろん，学校教育の中で学びを保障することも必要である．

（6）収入・住まいの二極化について

日中通っている場所については，福祉事業所と一般就労に二分される．これはそのまま収入の金額にも反映されてくる．収入の二極化である．この状況は本人にどのような影響を与えているのか．

また，親のフォローがある実家での暮らしと，グループホームの暮らしという点でも二極化が見られた．

そこで，①収入の差，②住まいの差で今の暮らしをどう思っているかの関連をみた．

①収入の差に注目した場合の特徴

まず収入の差に注目してみた（表13）．

最初に〈1万円台以下の収入の人：19人〉についてである．18人が肯定的な意見である．「あまり楽しくない」を選んだ1人は，仕事に関しても生活に関しても「あまり楽しくない」を選んでいる．仕事面では「気持ちが落ち着かず乱れていて，朝，起床できない」との記述があり，葛藤がある様子だった．生活面では「あまり楽しくない」を選びつつも，すぐ次の「どんなことが楽しいですか？」に答えており（本来は「とても楽しい」「まあまあ楽しい」を選んだ人が答える項目だったが，回答があった）「家で自分の時間を過ごすとき」を選び，生活の中に楽しみを持っていることが分かる．

また，〈2～3万円台の収入の人：5人〉と〈7万円以上の収入の人：5人〉については，仕事面・生活面ともに「とても楽しい」「まあまあ楽しい」と全員が回答している．収入についての回答のなかった3人も，生活面で「とても楽しい」「まあまあ楽しい」と回答している．収入による暮らしの感じ方に差は見られなかった．

②住まいの差に注目した場合の特徴

次に，住まいの差に注目してみた（表14，表15）．「実家」で暮らす人は23人である（内1人は「その他」と回答していたが，記述欄に「家族」とあり，実家から通っていることが確認できた）．仕事（学校）に対して「とても楽しい」「まあまあ楽しい」と答えたのが21人，「分からない」が1人，「回答なし」が1人であった．生活に関しては，「とても楽しい」「まあまあ楽しい」と23人全員が回答している．また，「実家」から通うグループの中の7人は仕事（学校）での困り感を有していたが，6人が自分から誰かに相談して解決していた．「解決していない」1人は「環境が1年ごとに変わっていく．変化にそんなに強くない（人見知り）」「会話できない（言葉のキャッチボール）．1回では聞き取ってもらえない」といった自分

を対象化して「そこまで困ってない．慣れた．相談するほうがめんどくさい．人と会話しにくい」と折り合いをつけている様子が見られた．生活面では10人が困り感を有していたが，7人が自分から相談して解決している．「解決していない」1人は先ほどと同様の人物である．詳細の回答がない人が1人いたが，保護者の回答では「困ったことはない」とされており，意見が食い違っている．その後の回答では，生活に楽しみを持っていること，生活を楽しいと感じていること等が書かれていることから，困ったことがあっても，生活を楽しんでいる様子は

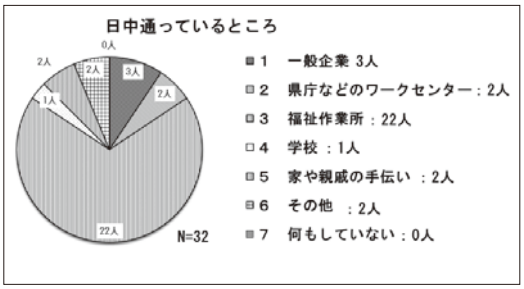

図９：日中通っているところ

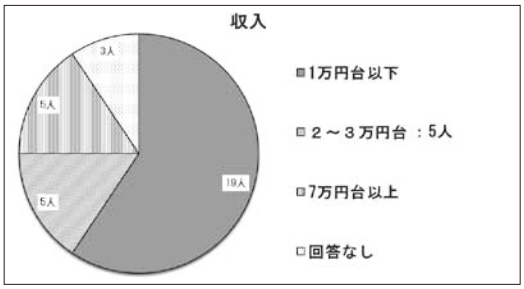

図 10：収入

表 13：収入と仕事，生活の楽しさ　（人）

	総数	とても楽しい	まあまあ楽しい	あまり楽しくない	まったく楽しくない	わからない
1万円台以下	19	18		1	0	0
2～3万円台	5	5		0	0	0
7万円以上	5	5		0	0	0
回答なし	3	3		0	0	0

表 14：住まいと仕事，生活の楽しさ　（人）

	総数	感じる場面	とても楽しい	まあまあ楽しい	あまり楽しくない	まったく楽しくない	わからない	回答なし
実家	23	仕事	21		0	0	1	1
		生活	23		0	0	0	0
グループホーム	8	仕事	8		0	0	0	0
		生活	8		0	0	0	0
一人暮らし	1	仕事	1		0	0	0	0
		生活	0		1	0	0	0

表 15：住まいと困り事　（人）

	総数	仕事での困り事			生活の困り事				
			自分から相談して解決	解決していない		自分から相談して解決	声をかけてもらう	解決していない	回答なし
実家	23	7	6	1	10	7	1	1	1
グループホーム	8	4	4	0	4	4	0	0	0
一人暮らし	1	0	0	0	1	1	0	0	0

うかがえる．

一方グループホームに暮らす人は８人である．仕事（学校），生活ともに「とても楽しい」「まあまあ楽しい」と答えたのが８人全員であった．１人は保護者見守りのもと，一人暮らしに挑戦している．先ほど１万円台以下の収入の人の中で「あまり楽しくない」と答えた事例である．生活に関しても，同様の結果であった．また，「グループホーム」から通うグループでは，４人が仕事（学校），生活両面に困り感があるものの，全員が自分から誰かに相談して解決していた．

住まいによっても暮らしの感じ方に差は見られなかった．

以上の結果から，収入や住まいの違いに関係なく，それぞれがその人なりの生活を楽しんでいることが分かった．

５　インタビュー調査の結果

ここでは，インタビューを行った３人の様子について簡単に紹介する．[8)]

（１）Ａさん（20代中頃・女性・ダウン症候群）

Ａさんは修了後８年が経過している．修了後最初の職場で仲間とトラブルを起こすも，様々な人と相談し現在の職場に移っている．

日々の暮らしの中では，コンサート等，生活に楽しみを持ち，また信頼できる仲間の存在や集団の中でやりがいを感じることで，その人や集団を心の基盤としながら困った時も乗り越えているように感じた．また，学ぶことへの意欲が強く，それが社会への要望にもつながっているように思う．インタビューをしながら，困っている人を助けたいという優しい気持ちがとても印象的で頼もしさを感じた．

（２）Ｂさん（20代前半・男性・知的障害）

Ｂさんは，県外出身者である．知的障害特別支援学校高等部卒業後に職業訓練校へ１年通っている．本校を知り，グループホームで生活しながら通学した．現在もグループホームから職場に通っている．

Ｂさんも生活の中に楽しみ（ソフトボール，親友と会うこと）を持っている．また，相談でき，信頼できる人がいることで，辛かった働き始めの時期（陰口を言われる等，アンケートに記述があった）も乗り越えていると感じた．仕事面でも，集団の中で頼られる自分を感じ，その状況を客観的にとらえているようだ．

（３）Ｃさん（20代前半・女性・知的障害）

Ｃさんは修了後，福祉事業所を経て，公共職業安定所の有期雇用（３年間）に就労した．今年度３年目の年となり，転機を迎えている．

Ｃさんは専攻科で仲間を増やしており，その関係が現在も続いている．友人との旅行をすごく楽しみにする様子は，友人への信頼感の表れと言ってもいいだろう．次の仕事がどうなるかというモヤモヤした感情も持っているが，一方で，自分が困ったことを保護者に相談しながらも，いつの間にか自分で解決していたという姿も見られている．そういった自分の変化も感じているようだった．

６　考察

（１）集団で過ごす経験

職場であったり，趣味の時間であったり，本人が「親友」と呼ぶ人や，集団の中で役立つ自分を感じるような場面がある．集団の中で楽しく過ごす姿もある．大なり小なり，生活のいろいろな場面で過ごす場があるようだ．これは，ある種自分の居場所＝自分が輝ける場所（いて

楽しい，やりがいがある，頼りにされている，安心できる，自分が認めてもらえる）を見出していると言っていいのではないだろうか．

アンケートやインタビューからは，専攻科での学びの様子が具体的な思い出として残っていることが分かる．特に，仲間と一緒に試行錯誤し，計画・実行できたことの記述が多かった．青年期に同世代の仲間集団で活動する中で，受け入れられたり，価値観をぶつけたりしながら過ごす経験をすることに大きな意味があると推測される．

（2）信頼できる人の存在

アンケートからもインタビューからも，相談できる人の存在がうかがわれた．自分から言える人もいれば，話しかけてもらう人もあるが，どちらにしても修了生本人のことを受け止めてもらえる人であるようだ．理解してくれている人ととらえることもできるが，逆に言えば，相談できる人との人間関係を少なからず形成していると言えよう．やはり，「聞いてくれる．分かってくれる」人の存在は重要である．信頼できる人の存在は，先に述べた集団で過ごす経験とも密接に関わっており，受け止めてくれる人がいることで，集団の中の自分を感じることができているように思われる．

インタビューを行った3人は，それぞれに信頼する友人がいた．Aさんは職場の中に何でも相談できる「親友」を，Bさんはけんかするような関係も築いており，Cさんは専攻科からの関係を続けている．それぞれに様々な人間関係を形成している．これも，19・20歳の時期に意見を，もっと言えば，お互いの価値観をぶつけ合う経験をしたことが，自分を客観視することにつながり，様々な場面での人間関係を形成することにつながっているのではないだろうか．

一方で，休日は自分の時間を満喫している人も見受けられる．そして，職場で割り切って関わりながら仕事に従事している．これもまた，その人なりの人間関係の作り方だと言えるだろう．ただ，この修了生も学校の同窓会には出席している．学生時代の仲間と過ごす時間を支えとしているかもしれないが，詳しく聞き取る必要がある．

（3）「七転び八起き」の経験

ほとんどの人に，くじけそうなこと等はそれぞれある．修了生たちの状況から，困ったことがあったり，精神的にダメージを受けたりしていても，周りの支援を受けながら，再び人生に立ち向かおうとする姿も印象的だった．様々な事情があるので，状況や必要に応じて離職することもあろう．最近は離職率に注目することが多いようだが，それよりも，その後，どのようにして次の段階に向かっていくのか，つまり，自分にとってどんな暮らし方や職場等がいいのかについて考えていけるかどうかが重要であろう．

アンケートでもインタビューでも，それぞれに対人関係等の悩みを抱えている面がうかがえる．社会生活にはそういうこともあるだろう．しかし，それぞれに段階的に，くじけそうなことを経験し，乗り越えることで，時系列で自分の変化を感じてきているようだ．「なんで上手くいかないんだろう」「次はこうしてみようか」といった，葛藤や試行錯誤を繰り返し，自分と向き合いながら計画を立てたり，研究を進めたりする「七転び八起き」の経験．青年期にじっくりとそういう経験をすることが，社会に出てからも，力の根幹になっていそうである．

（4）社会への要望と将来への希望

3人へのインタビューでは，社会への要望は

具体的な内容と抽象的な内容に分かれたが，ニュースの情報や自分の暮らしに密接にかかわる事柄をよく捉えていた．修了生たちがそういった考えを持っている要因は，専攻科時代に学んだ「研究ゼミ」や「教養」，「くらし（情報）」といった様々な情報に触れる学習の経験があるようだ．田中（2016）は生涯学習と学校教育を機械的に区別しわり切って考えるのではなく，学校でどんな教育を受け，どんな「学ぶ力」を身につけてきているかといった部分で卒業後の生涯学習の在り方と学校教育等の在り方が密接に関わっているとしている．「研究ゼミ」や「教養」「くらし（情報）」といった知の探求をめざす学習は，青年たちに「学びたい」という意欲を持たせるのではないかと思う．実際に学習の延長で，社会人になってからも新聞等を使って情報を得ている姿がそのことを表しているだろう．

また，現在の暮らしに満足しながらも，家庭を持つことや，一人暮らしをすること，シェアハウスで仲間と暮らしたいという希望がある．自分自身の生活基盤となる場所への憧れを持っているのではないかと感じる面もある．一方で，将来は父母が先にいなくなることを意識している人もいた．

（5）今後に向けた課題

①精神的不調を訴える人への対応

精神的不調を訴える人は，在学中からその傾向があったことが見えてきた．本校として，教育課程の再検討やフォローアップの工夫等，対応が必要かもしれない．

②学習の更なる充実

考察で述べてきたように，「学ぶ力」を育む事も重要であろう．本校は大学の附属校であることを活かし，もっと大学教員を活用した授業の創造を行うこともできるだろう．また，調査から見えてきた，結婚や一人暮らしの希望をどうとらえていくのかも大切な視点となってくる．結婚や一人暮らしに向けた学習は現在も行っているが，さらなる充実が必要である．

③支援が必要な部分への認識

今回の調査の返信状況から考えると，在学中はある程度教師のフォローがある中で力を発揮していたことがうかがえる．調査項目をより分かりやすいものにする等の工夫が必要かもしれない．

④収入の二極化をどう考えるか

収入が3万円台までと7万円以上に二極化していることは先にも述べた．平成26年度の全国の就労継続支援B型事業所の平均工賃は14,838円である.[9] さらに平成27年4月現在で，障害基礎年金額は1級で年額975,100円，2級で780,100円である.[10] この障害基礎年金を12か月で割り，平均工賃と足したものを12か月分の年収として計算してみると（小数点は切り捨て），1級であっても，1,153,152円の年収となる．2級については958,152円となり，年収は100万円を下回る．

近年は，「子どもの貧困率」が16.3％とされている．また，藤田（2016）[11] は，「概ね10代から30代」を「貧困世代」と呼び，現代の若者たちが社会から貧困を強いられていることを訴えている．このような現代社会の状況を考えた時に，今後自分の力ではどうしようもできない事態に陥る可能性が考えられる．この点に関しては教育のみの問題というよりは，社会全体での整備が必要であろう．

7　おわりに

調査に実際携わると，悩みを抱えながらも，多くの人に支えられながら乗り越えていく姿に胸を打たれた．悩みを解決する姿，自分を対象

化して見つめる姿，社会に目を向けより良くするための思いを持つ姿，将来設計に関して具体的に教えてくれる姿等が明らかになってきた．これは，「学びの作業所」や「福祉型専攻科」等の「学びの場」としての自立訓練事業を利用する方の保護者対象に調査を行った丸山（2015）で，「楽しく通える居場所の確保，自信の広がり，主体性の広がり，経験の広がり，友人関係の広がり，具体的な技能の広がりなど」が通所者の変化として感じられる[12]としたものと重なる部分がある．

調査を通して様々な状況に置かれているが，それぞれが自分らしい人生を，自分らしく生きている姿が見え，本校修了生たちのたくましさを感じる結果であった．ただ，本研究はインタビュー調査のさらなる分析や，グループインタビューを行う計画である．それらの結果をまとめ，専攻科教育，ひいては青年期教育の意義について考察を深めていきたい．

謝辞

本研究は，本校専攻科修了生ご本人と保護者の方に研究趣旨をお伝えし，調査への協力の了承をいただいた．調査実施後に，ひさしぶりに学校祭に来てくださる方もあり，調査者の大きな喜びとなった．お世話になった専攻科修了生と保護者の皆様に改めて感謝申し上げたい．

（さわだ　じゅんたろう・のなみ　ゆういち・みき　ひろかず）

注

1）伊藤修毅・越野和之（2009）「高等部単置型知的障害特別支援学校の現状と意義」『奈良教育大学紀要第58巻第1号（人文・社会）』奈良教育大学　pp.79-99

2）小畑耕作（2006）「養護学校高等部の現状と進路実態から見た専攻科の意義」『障害者問題研究』第34巻第2号　全国障害者問題研究会　pp.92-99

3）船橋秀彦（2014）「障害青年の専攻科設置・「学びの作業所」づくり運動の意義と課題」『障害児の教育権保障と教育実践の課題―養護学校義務制実施に向けた取り組みに学びながら』群青社　pp.61-81

4）鳥取大学教育学部附属養護学校著（1979）『研究紀要第1集』鳥取大学教育学部附属養護学校　はじめにより引用

5）渡部昭男（2009）『障がい青年の自分づくり―青年期教育と二重の移行支援』日本標準
この中で紹介されている私立養護学校の高等部専攻科は三愛学舎（岩手），いずみ養護学校（宮城），若葉養護学校（群馬），光の村養護学校秩父自然学園（埼玉），旭出養護学校（東京），聖坂養護学校（神奈川），特別支援学校聖母の家学園（三重），光の村養護学校土佐自然学園（高知）である．また，発達障がいや軽度の障がいの青年を対象としているのは，見晴台学園（愛知/NPO法人），やしま学園高等専修学校（大阪），鹿児島城西高校（鹿児島）で，専攻科・別科がある．

6）山本恭子・本城睦子・谷口直紀・西垣美恵子（2008）「鳥取大学附属特別支援学校の高等部専攻科における取り組み―「学校から社会へ」「子どもから大人へ」の移行支援教育として―」『鳥取大学生涯教育総合センター研究紀要第5号』鳥取大学生涯教育総合センター　pp.17-32

7）渡部昭男　前掲　pp.153-167

8）インタビュー調査の詳細については，2017年度発刊予定の紙面に掲載予定である．

9）厚生労働省ホームページ「障害者の就労支援対策の状況　平成26年度平均工賃（賃金）月額の実績について」より
http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/shougaishahukushi/service/shurou.html　最終アクセス日：2016. 10. 26

10）特定非営利活動法人　鳥取県障害者就労事業振興センター『よりよい暮らしのために2015年度版』障がい者支援施設　米子ワークホーム　p.70

11）藤田孝典（2016）『貧困世代　社会の監獄に閉じ込められた若者たち』講談社．藤田は本書の中で「教育現場からの排除，奨学金返済や年金保険料支払いの重苦，雇用や労働現場の劣化，支える家族機能の縮小，週卓政策の不備，幾重にも重なる社会構造が若者を追

いつめてきている現代日本」と述べている.

12）丸山啓史（2015）「知的障害のある青年の「学びの場」としての自立訓練事業の役割―母親等を対象とする質問紙調査から―」『京都教育大学教育実践研究紀要第15号』京都教育大学　pp.181-190

参考文献

安達忠良（2008）「特別支援学校の進路指導からみる就労支援の課題―過疎地域での実践」『障害者問題研究36（2）』全国障害者問題研究会　pp.136-142

小畑耕作（2013）「「学びの場」づくりは何をめざしているのか」『みんなのねがい』2013年3月号　全国障害者問題研究会　pp.32-35

大竹みちよ・永吉輝美（2009）「発達障害者の移行・就労継続に必要な支援―発達障害生徒が学ぶ「見晴台学園」の卒業生追跡調査から―」『SNEジャーナル第15巻第1号』文理閣　pp.93-117

國本真吾（2012）「障害青年の教育権保障をめぐる現状と課題～教育年限延長の要求と特別支援教育～」『公益財団法人鳥取県人権文化センター研究紀要解放研究とっとり第14号』公益財団法人鳥取県人権文化センター　pp.30-43

厚生労働省（2012）「国民生活基礎調査」

下野新聞　子どもの希望取材班（2015）『貧困の中の子ども　希望って何ですか』ポプラ社

白石正久（1994）『発達の扉〈上〉子どもの発達の道すじ』かもがわ出版

白石正久（1996）『発達の扉〈下〉障害児の保育・教育・子育て』かもがわ出版

田中昌人・田中杉恵（1981）『子どもの発達と診断1乳児期前半』大月書店

田中昌人・田中杉恵（1982）『子どもの発達と診断2乳児期後半』大月書店

田中昌人・田中杉恵（1984）『子どもの発達と診断3幼児期』大月書店

田中昌人・田中杉恵（1986）『子どもの発達と診断4幼児期2』大月書店

田中昌人・田中杉恵（1988）『子どもの発達と診断5幼児期3』大月書店

田中良三（2016）「障がい者の生涯学習支援の展望と課題」田中良三・藤井克徳・藤本文朗編『障がい者が学び続けるということ―生涯学習を権利として―』新日本出版社　pp. 201-220

鳥取大学教育学部附属養護学校（1996）『研究集録』鳥取大学教育学部附属養護学校

鳥取大学教育地域科学部附属養護学校（2002.）『「生活を楽しむ」授業づくり―QOLの理念で取り組む養護学校の実践―』入江克己・渡部昭男監修　明治図書

鳥取大学附属特別支援学校（2005）『「自分づくり」を支援する学校』渡部昭男・寺川志奈子監修　明治図書

鳥取大学附属特別支援学校（2016）『研究紀要第32集』鳥取大学附属特別支援学校

平井威（2015）「地域を出て地域で暮らすために必要な支援とは何か」『明星大学研究紀要―教育学部―』明星大学　第4号　pp.95-111・第5号　pp.111-125